

ユーラシア大陸と万葉集 I

ユーラシア大陸と万葉集 I

寺川眞知夫

万葉古代学研究所では、2001年4月から「万葉集とユーラシア I」のテーマで主宰共同研究に取り組んで来た。

主宰共同研究は本研究所の主要事業として位置づけられており、奈良県の補助を得て行われる共同研究である。本研究所では『万葉集』研究において国際的な展望をもち、新たな視点を多角的に開き得る研究成果をあげることが期待されていると自覚して取り組んだ。ここに報告する成果は多くの研究参加者またこれを支えてくださった方々のご協力を得て、こうした期待に応え得る成果をえたと考えている。

共同研究を開始するにあたっては、研究所の「万葉古代学」の名にふさわしく、研究メンバーを万葉集研究の専門家だけに限定せず、周辺異分野の研究者にも参加を求め、幅広い研究を目指すことを基本的な方針の一つとした。

「万葉集とユーラシア I」のテーマは万葉集研究に国際的展望を拓くものである。『万葉集』に限らず、日本文学を東アジアの範囲で捉える試みは、現在ではもはや一般化している。特に歌謡・万葉歌については照葉樹林文化帯で繋がる中国南部の少数民族の歌の世界との関係で捉える試みも早くから行われ、すでに多くの成果が収められている。しかし、『万葉集』をユーラシアの範囲に位置づけて研究を試みるのはおそらく初めてであろう。従来にないきわめて大きな視野に立ったテーマであるが、逆に漠然とした大風呂敷を広げたテーマという危惧を与えたかもしれない。しかし、高い視点に立って、二つの基本方針を尊重し、このテーマによる共同研究の出発が許された関係各位には深く謝意を表したい。

万葉集研究の現状は、伝統的学問の範疇、すなわち文献学的研究・訓詁注釈学的研究・比較文学的研究を中心として行われて、今も多くのすぐれた業績が着実に積み重ねられている。しかし、文学的研究にしても、訓詁注釈学的研究にしても、ある意味では行きつく所まで行き着いているといった感もなきにしもあらずである。折しも、諸家による研究史『万葉集の歌人と作品』（全12巻）が纏められているのも、多角的かつ緻密に研究史を振り返り、研究上の問題点を明確して、研究における一種の閉塞感を打開しようとの試みであるともいえる。比較文学的研究においても、伝統的な漢字文化圏の中で『万葉集』をとらえる文献比較にもとづく伝統的訓詁注釈的研究が活発に行われており、優れた研究が重ねられている。が、この分野では、従来の研究の枠組から抜け出して、視点を照葉樹林文化帯で繋がる中国南部の少数民族の声の歌の世界に据え、日本人万葉研究者自らの目と耳によって調査研究に基づく比較研究をしようとの試みも始められている。また、国内でも折口信夫らによって始められた南島の声の歌の世界に改めて目を向け、声の文学としての歌という視点からみた民謡のありようと『万葉集』との比較研究が行われ、多くの成果が収められつつある。ただ、これらは東アジアの文学という視点も含めて、共通の文化をもつ地域の中での比較研究であった。

これに対して、本共同研究のテーマは『万葉集』を異文化地域も含めた世界の歌の中に置いて相対化しつつ、比較研究しようとの試みである。つまり、共通文化をもつ地域をも超えたきわめて広い世界に目を開き、基本方針に従って万葉集研究者に限らない異分野の研究者も含めて、万葉集を相対化

する視野を保ちつつ総合的に研究しようと志したものであった。本研究は西欧文学に視点をおく比較文学研究者の日本文学研究の視点に近いかも知れないが、日本文学研究においては従来やや欠けていた視点でもある。ここでは、西欧文学との比較研究の方法にも学びながら、『万葉集』をユーラシアの古代の歌の世界で相対化しつつ研究しようとするものであった。研究は視点が新しければよいというわけではないが、これは新たな成果を期待しえるものであった。それというのも、『万葉集』所収歌は記された歌ではあるが、背景に声の歌を有し、声の歌から文字の歌への流れに位置づけえる歌がある。世界の中にはこうした流れを窺わせる歌は他にもあろうから、世界的な視野で相対化してみることが可能であると考えたのである。しかし、いずれの地域を視野に入れれば、そうしたことが可能性が拓けるのか、予測を立て得ないところもあり、僥倖を期待するほかないところもないわけではなかった。

そこで、点と線にならざるをえないにしても、当研究所の方針にしたがって、①他の分野の研究者の目を通してみると『万葉集』の歌はどのように見え、どのような研究の可能性があるのか、②他分野の研究成果は『万葉集』研究にどのような可能性を開いてくれるかといった、いわば『万葉集』を古代という視点から総合的に考えるために、関連諸分野の研究成果をより広く知る取り入れて、多様な視点からの研究を行えるように配慮した。それは、世界の歌の状況に『万葉集』と流れを一にするものがあるのではないかと考えたからで、ここにトレンチを掘ってみようというわけである。

本研究においては、人的には後者にウエイトがかかったが、多彩な顔ぶれはこうした基本方針と研究の2つの狙いとかかわっている。ここで共同研究者および講師の発表題目を紹介させていただくと、当研究所の研究員を中心に日本の歌を対象とする方が多い。日本以外の地域では、ヨーロッパを専門となさっている方をお願いできなかったのは残念であったが、韓国、中国、タイ、中近東を専門になさっている方もしくはこれらの地域の状況に通じておられる方をお願いした。また関連分野では日本考古学の発掘の成果を思想史的視点で研究されている方をお願いした。さらに共同研究者を得られなかった地域・分野については講師をお願いしてお話を伺った。地域は蒙古、シベリアを中心とするロシア、インド、台湾・フィリピン、分野としては比較神話学、古代音楽に関してであった。当方の説明不足もあって共同研究の狙いどおりでないお話もなくなかったが、講師の方々には新たな視点を聞くことのできる示唆に富んだお話をさせていただくことができた。

研究発表や講演内容の詳細は報告をお纏めいただいた各論でご覧いただくが、参加者・題目とその概要を掲げると、次の通りである（一部纏められなかったものもある）。

〔第1回、平成14年6月9日（日）〕

●寺川真知夫 「『万葉集』の宴を題詞にもつ歌」

『万葉集』の歌の成立基盤の重要な場の1つである宴は、日本の伝統的な儀礼性を保持した場と、中国伝来の宴の文雅を中心にした面に影響を受けた詩歌創作の場となったものがあり、その両極の間に2つの要素のどちらかに振れつつ折衷した場が成立していたとみられる。そこに詠まれる歌にはこれに対応して儀礼性を明確にした歌と創作そのものとなった歌遊戯的な歌などがあるが、こうした場を視野に入れることで、『万葉集』にみえる宴における歌のありようが明確になってくることを、事例に触れながら考察した。

〔第2回、平成14年8月31日（土）〕

●上野誠当研究所副所長 「本プロジェクトの方法論の基礎をいかに考えるか—民俗学と万葉研究との関わりから」

本テーマの研究においては、国文学研究から万葉研究を解放して、巨視的観点から文学の発生、

発展の歴史を位置づける。比較においても広い視座をもち、文学を発生せしめた文化的基盤の同質性・異質性を論じるようなものでありたい。そこに文化人類学・民俗学・文化史学・歴史学の研究成果や方法をいかに援用するかの方法論についても視野に入れて検討すべきであろう。

●原山煌桃山学院大学教授 「モンゴルの口承文芸―特色と問題点―」

モンゴルの口承文学はモステールトが『オールドス口碑集』に整理しているように、神話・伝説・おとぎ話・言い伝え・俗諺・歌謡・俚謡・英雄叙事詩・ヨロール（祝詞）・呪詛等多様であり、それらは周辺の多様な文化の影響を受けている。彼らがウイグル文字を獲得したのはチンギスハンの時代（13世紀初頭）であり、書写は元朝以後になるので、研究対象は口承文芸が中心となる。モンゴルの口承文学では、表現の特質として対句や韻が多く利用されるが、これは忘れないための工夫であったようで、重要な意味をもっていたようにみえる。文芸の基盤にはシャマニズムの世界観があるが、チベット仏教の影響を排除するといわゆる神話といえるものではなく、始祖伝承がこれに近い。研究対象へのアプローチにおいては、その成立してくる多元的な要素のいずれと関わっているのか、つねに見定めようとする努力が必要である。

[第3回、平成14年9月1日（日）]

●辰巳正明國學院大學教授 「『大歌』の発生論的検討―中国南西少数民族の歌唱系統との関係から」

中国トン族には恋愛歌をふくむ長歌が伝承されているが、これは公儀の歌で、民族の歴史を歌う。こうした視点から万葉集を見ると巻13に収められた長歌群はこの大歌の系譜に繋がるものと理解される。つまり巻13の長歌は大歌所（歌舞所）に伝承された歌で、恋歌をふくめてこうした長歌は、民族（部族）の歴史を伝える歌として、古代にある普遍性をもって存在したとみられ、巻13の長歌もこうした大歌としての解明が必要である。

●松村一男和光大学教授 「異界の神話学：海の異界を中心に」

異界としての海への関心は日本神話でも海幸彦・山幸彦の物語や浦島伝説にみられる。世界的にみても人々は見聞する周囲以外の世界への関心から、娯楽のための空想的な異界訪問の物語や異世界への航海の情報を伝える物語を形成している。これらは、海の神話の系譜、航海の知識の系譜という2つの系譜を立てることができる。そうした系譜のなかで成立した物語について概観すると、テーマと構造は普遍性をもつものに対し、肉付けは文化的な特殊性と多様性をみせるといえる。したがって異界をどこに設定するか、成功型か悲劇結末型かは、文化的傾向あるいは文学ジャンルとかがわっているといえる。

[第4回、平成14年10月27日（日）]

●王暁平帝塚山学院大学教授 「敦煌の願文と日本の願文（万葉集と敦煌文学）」

万葉集の漢語の出典は作品の原典よりは類書や総集・辞書のほか、通俗の文学や千字文など実用書もあったとみられる。『万葉集』には千字文に依拠したとみられる表現（巻10-1884）のほか、敦煌願文、なかでも亡文や臨壙文など書儀に用いられる表現が、とくに憶良の死と病にかかわる仏教的表現には多くみられる。また『万葉集』には仏教歌謡「曲詞」「曲子詞」の作品の表現を用いたものも多く見られるので、こうした分野の研究をもっと進展させる必要がある。

●皆川隆一慶応義塾高校教諭 「神の歌・死霊の歌―ヤミ族の歌の掛け合い―」

台湾とフィリピンの間の蘭嶼にいるヤミ族は独自の文化をもつ少数民族である。彼らには家によって継承される政治的権力・伝統的宗教的権威は存在せず、母屋・小屋・舟などの新築・新造の祝、ミバライで3～5年かけて蓄えた財産を一度に使い尽くし、村人や島人の尊敬を得る威信獲得競争を行うというまったく平等な社会である。

彼らの儀式では、神の、人間では持ち得ない立派な家や舟などを讃える歌を歌う。またミバライでは歌の掛け合いがなされ、参加者は最初厳密な一対一で長老から年齢順に誰も一度は歌わねばならない。これらは伝誦歌が中心になるが、真夜中を過ぎて対応が崩れると、創作歌・即興歌の掛け合いが行われ、1人で3曲歌うこともある。最初に主人が歌う歌、たとえば「主人シャプン・バビヌンの歌」では、前半では母方は財産家であったと歌い、後半では父方は貧乏であったと歌う。相反する内容を歌うのが作法である。これは言霊信仰に基づき、言葉の霊力の中和を図るものである。彼らは死霊を恐れる。父の死霊も息子が自分より恵まれた立場や境遇を得ることを喜ばず、過ぎると災いをもたらすと信じている。神も人が一人で富も名誉も地位も何でも独占すると、「奢るな」「死霊だけでなく、人の妬みをかけて災いを受ける」と教え諭したという伝承を持っている。家を新築した場合には、新築儀礼のときに「家を建てて、あなたは死ぬ」といった不吉な歌を歌う。これも死霊を恐れてのことである。このように死霊信仰によって特殊な社会と歌を保持する人々もいるのである。

[第5回、平成14年12月22日(日)]

●金両基常葉学園大学教授 「韓国の詩律と音律と掛け合い」

韓国の伝統文学は伝と呼ばれるが、劇になると歌と呼ばれる。これらは途中で悲劇をふくんでも結末はハッピーエンドになる。一般に儒教の影響とされるが、シャーマニズムの影響とみるべきである。それゆえ、パンソリの音律・詩律には巫歌の影響がある。韓国の民謡は一般に3拍子とされるが、2拍子のものもある。農楽の囃子にみられるので、3拍子が一般的でも、2拍子も例外ではない。詩律の場合はまた4拍子である。これを歌うときは、4音を3拍子で歌うことになる。

●高橋孝信東京大学教授 「南インド・タミル古代文学の事例」

インド南端部には紀元1～3世紀に花開いた書記文学としてのタミル古典文学が存在する。これは470人の詩人の手になるさまざまな長さ(3～782行)の恋愛詩や英雄詩2381首(8割は恋愛詩)からなり、2冊の詞華集である『エトゥウトハイ(8詞華集)』『パットウパートウ(10の長詩)』として編まれている。恋愛詩には5つのジャンルがあり、それぞれに場所・季節・時間・動物・植物・鳥・主題・結婚の前後に関する詠むべき物や事柄等の決まりがあり、また登場する人物も主人公の女・その女友だち・母親・乳母、主人公の男・その男友だち・遊女で、それぞれの役割にも決まりがあって、これらを組み合わせて詩作する。テーマは数百あり、これらを繋ぐと、長編恋愛物語のようにもなる。詩人たちは古代パンディア王朝の首府マドゥライの宮廷文芸院サンガムで、詩作のための広義の文法書(規範書)『トルハーピヤム』(1～5世紀)を学んで詩作を行ったと考えられている。古代南インドにはこうした高度に様式化された恋愛詩が成立していたのである。

[第6回、平成15年1月12日(日)]

●岩城雄次郎日タイ文学者交流センター主宰 「タイにおける民間歌謡」

タイには多くの民間歌謡がある。スコタイ王朝第3代の王が1283年にクメール文字を参考にしてタイ文字を作ったが、『万葉集』のように歌が幅広く編まれることはなかった。民謡には雨季の歌、稲刈り・脱穀の歌、ソクラーン祭のころの歌、季節はずれの歌などがある。地域的には北部・中部・南部によって相違がみられる。稲刈り・脱穀の歌にも男女の掛け合いがみえるが、季節はずれの歌のラムタット(掛け合い物語の歌・中部)には男女の創作による掛け合いがみられ、またソクラーン祭のころの歌には歌垣的性格があり、男女が相手の気持ちを確かめる歌の掛け合いが多くみられる。

●栗原成郎創価大学教授 「キエフ・ルーシ（中世ロシア）における文学の発生」

ロシアを形成する東スラブ人の居住した南ロシアの地は古代からイラン系のスキタイ人やサマルティア人の支配を受けたところで、イラン系の言葉がスラブ語に入ってきている。スラブ人の世界は無文字社会で、988年にウラジミール公が東方正教会を受け入れたときに文字が入ってきた。しかし偉大な詩人プーシキンが出て世界文学のレベルにまで達する19世紀初頭までの中世ロシア（11～17世紀）においては、ロシアの洞窟修道院の修道士たちがビザンチウムの年代記に倣って作ったロシア編年史「原初年代記」と「イーゴリ軍記」しか面白い作品がない。前者はロシアの環境をうつす必要性からスラブの表現をなしており、また口承文芸・民間歌謡・民間伝承を取り込んだとみられるアメン民族との戦いの場面は叙事詩になっている。後者はキエフ公国の小公国のイーゴリ公が南ロシアのステップにポーロベツツイ人討伐に出かけて一族4人が捕虜となったものの、脱出に成功して故国に戻る物語で、教養ある無名従軍詩人がそのそばにいて見聞したことを、詩人ボヤーンに仮託して語ったとみられる。ここには口承文芸時代の賛美と誹謗の詩を作る呪術的な力への信仰が働いており、また女たちの泣き歌と男たちの叙勲詩が織り込まれているのが注目される。〔第7回平成15年4月20日（日）〕

●辰巳和弘同志社大学助教授 「神仙思想の移入と倭化」

永遠の生命を願う中国の神仙思想は、弥生時代には日本に入り、葬制などもふくめて日本人に大きな影響を与えたが、日本人はそのまま受容しただけでなく、これを倭化して受容した。倭化の典型は勾玉のデザインを長生のモチーフに取り入れたところに認められる。万葉歌を成立させた天平文化はこうした大陸文化の倭化の歴史の上にある。

●廣瀬量平京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長 「古代の歴史と音楽」

〔第8回平成15年7月6日（日）〕

●松田信彦万葉古代学研究所主任研究員 「日本古代歌謡の生態」

『万葉集』には短歌が多いが、記紀歌謡には長歌形式のものが多い。これらを分析してみると、形式的には、五七・五七・五七七という短長歌の他は、五七群+片歌か、五七群+短歌という形になっており、ほかにも短歌形式をふくむ構造になっていることが指摘できる。しかも最後の五句が歌い手の感情表現を担っているため、短歌発生メカニズムは重層的であるにしても、これらの独立が短歌成立の1つの道筋となった可能性が想定できる。

●高橋孝信東京大学教授 「タミル古典恋愛歌—歌と歌論—」

古代南インドのタミル古典文学には数百のテーマがあり、そのテーマの繋がりを歌路と呼ぶと数種類の歌路があり、時代とともに洗練されたものになる。インドの諸学芸は、規範書の規則に従って作られていると考えられている。またインドでは原作と注釈（詞書きをふくむ）は対等関係とみなされている。しかし最古の歌論書『トルハーッピヤム』の規定には意味が曖昧なものが少なくなく、歌と歌論は相互補完関係にあることになるが、歌を歌論によって解釈してもうまくいかないところ、詞書きと歌が矛盾するところもある。こうした点を詳細に検討して問題を考察してみると、『トルハーッピヤム』は古典恋愛文学の規範書とはいえ、また注釈は800年から1000年も時代が下るもので、原典とは別物といわなければならない。

〔第9回、平成15年9月27日（土）〕

●田畑千秋大分大学教授と奄美民謡の会 「奄美の八月踊り」

奄美の歌には神謡・八月歌・鳥歌・イトウ（労働歌）・わらべ歌・口説きがある。鳥歌は男女個人の歌の掛け合いになるが、マンカイ遊びは男女の集団の歌の掛け合いになる。近代になって名人

が輩出し、歌遊びの場も複雑になっている。八月踊歌という語はなく、通称である。八月踊りでは三味線を用いず、チヂンと称する太鼓のみ用いる。チヂンは男が持つ地域と女が持つ地域とがある。名音集落の場合、アラヒツィ（新節・旧暦8月最初の丙と丁の両日）、シバサシ（アラヒツィから7日目の壬癸の両日）、クガツクンチ（旧暦9月9日の豊年祭）に歌い踊られる。最初アラシャゲイ（神遊びの庭）で踊られ（ミャー踊り）、つづいてヤースイキ（家々を巡ること）をして踊る。太鼓ツイズイミは男性がもつ。歌も男性からはじめられ、元歌からはじまって流れ歌、アラシャゲイ歌と続き、一つの踊りが終わる。踊りはミツシャからはじまり、カドコ・イツツと続くがあとは定まっていない。最初はゆっくり踊り、しだいに調子を速める。速くなるとアラシャゲイに移り、最高潮に達したときに1つの踊りが終わる。着物も、昔はいまのように統一した浴衣ではなく、アラヒツィの時、シバサシのときでそれなりのきまりがあった。

話のあとで、坪山豊さんの歌の実演と大阪在住の大熊出身の人たちの踊りの実演が行われた。

〔第10回、平成15年9月28日（日）〕

- 井上さやか万葉古代学研究所主任研究員 「連合表現にみえる古代的発想—『万葉集』から〈文学の発想を考えるために〉」

書記文学である『万葉集』から文学の発生を考える以上、書かれた歌を手がかりにするほかない。そこで歌の連合表現、すなわち歌の口誦性をうかがわせるとされる枕詞や序詞に注目してみると、枕詞は土地・地名にまつわる叙事文学に属する神話的な表現を基盤にして成立したとされ、抒情詩的な同音的結合よりも古いとされるけれども、集中には同音的繰り返しの枕詞も少なくなく、しかも作者未詳歌群の恋歌にみられる。これは同音繰り返しの枕詞が恋歌のなかで成立した可能性を暗示するもので、この傾向は序詞についても認められる。記紀歌謡についてみると、語りと歌は未分化な状態にあるから、西洋文学的ジャンルを立てて文学発生の起点を一つとするよりも、多様性を認める方が日本文学のじっさいに即している。

- 劉雨珍中国南開大学教授 「楽府詩と万葉集」

〔第11回、15年10月26日（日）〕→各論参照

- 松尾光万葉古代学研究所統括研究員 「宮廷と宴の場」

『日本書紀』の歌謡の場を検討し、部民制下では宮廷に廷臣が集まる場はなく、歌があってもそれらは氏族内の宴会において歌われていた。しかるに、推古朝前後に官司制が成立すると、王宮で大王主催の宴が催されるようになり、これにみあった宮廷歌謡が成立してくることになる。そうしてこれが、万葉歌の源流となったとみられる。宮廷外には童謡や時人歌が存在していた。中国の場合は童謡は肯定的にとらえられていたのに、『万葉集』にはみえないことについては検討の余地がある。

- 内藤磐早稲田大学高等学院教諭 「上代のウタにおける節目とその変容」

記紀歌謡を検討すると、『古事記』の最後の歌謡は顕宗記の置目の歌になるが、これは書紀第15巻の最後の歌になる。この歌は近江へ去る置目老女を偲ぶ顕宗天皇の歌で、天智紀の最後、天皇没後の3首の歌謡に対応して、近江への永訣の表明となっている。『日本書紀』は天武・持統の3巻にはウタを収めず、『万葉集』がこれに代わるが、記紀歌謡を採らない。また記紀万葉の歌は基本的には思想的に性描写の歌を採らないが、民衆の歌にはもっと活力が溢れていたはずで、この研究においては視野を広く取りつつ、歌は人々の生活にとっていかなる意義をもっていた問い直すべきであろう。なお、下掲の内藤氏の発表のまとめはこれと異なるが、当日の内容は上記のようであった。

〔第12回、16年1月11日（日）〕

●月本昭男立教大学教授 「古代オリエントの詩歌－雅歌の場合－」

シュメールの楔形文字で記された文献は紀元前3000年紀中ごろにみえるようになるが、文学作品として論じるには不明な点が多い。シュメール語の文学作品がアッカド語文学が記されはじめる2000年紀前半以降にもみえるのは、アッカド語文学を残した書記がシュメール語文学を伝えたことを示す。アッカド語文学のなかには、シュメール語文学の翻訳作品やそこに溯りえるギルガメッシュ叙事詩のようなものがある。シュメール語の詩歌には、神々の讃歌・祈禱歌・聖婚歌（ドウムジとイナンナ）・哀歌（ウル滅亡哀歌等）があり、アッカド語の詩歌には呪禱（治癒儀礼における祈禱歌）がある。アッカド時代も詩歌や祈禱には、シュメール語を用いたとみられる。

古代イスラエルの詩歌の古いものにはヤハウエの讃歌や井戸の讃歌などがある。『旧訳聖書』には詩篇があり、ここには讃歌・感謝・嘆き・王の詩・知恵の詩・予言詩などがある。雅歌のなかには主題を男女の愛とする歌も見えるが、キリスト教の伝統では比喩的に解釈される。しかし、これらは古代エジプトの恋愛詩、古代メソポタミアの祭儀詩（ドウムジとイナンナ聖婚歌）・アラブの婚姻歌・ソロモンが作った宮廷詩等を背景にする愛の歌が取り込まれたものと見られる。

期するところはあったとはいえ、闇雲のようなところも残したまま始まった共同研究であったが、以上のような方々のご協力による発表と熱のこもった共同研究を当研究所で二年間にわたって計12回実施される過程で、万葉を考えるうえで参考になる世界の歌とその周辺に広がる伝承や文化と僥倖ともいべき万葉に比較して考えるべき歌のありように出会うことができた。『万葉集』研究においても世界を視野に入れた文字の歌と声の歌との交渉に目を向ける必要があるとの見通しを立てることができ、本共同研究は十分成果を上げ得たと考えている。それらは主として書記文学の側からみて如何なる歌がより早く成立し、書記される歌になったかについて示唆するものであった。声の歌が如何なるルールに従って歌われているかについても具体的な知識が提供され、万葉の歌の成立の背景についての示唆も与えられた。

すなわち、古代のインド南部にはすでに細かな表現のルールに従って作られた恋の歌が存在したこと、またメソポタミア文化圏で書記文学として記録された宗教的な歌も、本来は恋の歌であったとの指摘がなされたことは注目される。恋愛詩の早い段階での書記化は中国の詩経などにも見られるところであるが、これらの地域においても恋愛歌がきわめて早い段階で書記され、場合によっては宗教の經典のなかに組み入れていること、あるいはそうした恋愛歌を作るための作法がきわめて早い段階で完成されていたとの指摘は、相聞歌を多く収載する『万葉集』とのかかわり、その恋愛歌の収載ということとの関わりでより深く考えてみるべき問題を提示しているいえよう。

もとより、『万葉集』の歌についていえば日本の、主として七世紀後半から八世紀の半ば過ぎまでに貴族の世界で詠まれ、記録された歌を雑歌・相聞・挽歌に大別して収めており、雑歌も多く恋歌だけに限られるわけではないが、歌の発生という視点からは注目される場所である。また、中国少数民族の対歌や奄美の歌遊びなどにおいても恋の歌が重要な位置を占めているが、これら声の歌においても表現の作法や歌の展開の道筋（歌路）があることも指摘された。歌の展開に作法があることは儀礼的な場においてみられるものであるが、これらだけに限定されるわけではなく、そうした現象が恋の歌においてもあることは万葉の歌の性格、その成立する場と声の歌との関係についても示唆をえることができよう。

こうしたところに注目すれば、世界的には地理的・歴史的状況のありようは異なっているとしても、『万

『万葉集』所収歌の成立するのと同じ営みが各地でなされている可能性は大きいのであり、そうした歌が文字に記録されるという僥倖あるいは不幸にであった地域で如何なる変化や現象が見られたかということのみならず、声の歌の生きている地域も含めた、世界の歌のありよう中で『万葉集』所収歌を相対化して研究できる可能性もしくは必要性のあることも理解されるであろう。すなわち、世界の文字化された歌の場合も、その定着時期の時代差を問題にせず、声の歌のありようと文字化という現象に注目すれば、『万葉集』研究に裨益する文字の歌があることが確認されたと思う。また未だ文字化されていない地域の歌は歌で、『万葉集』定着以前の歌われていた歌の存在形態を想定させ、『万葉集』所収歌の成立基盤や歌の理解を促し、その研究に裨益するものとする。

したがって、こうしたことを明らかにしえた本研究は、目的の一つとした『万葉集』に収められた歌を、世界の中の声の歌から文字の歌への流れの中に位置づけ、世界的な視野で相対化してみるという点について十分成功したと思われる。すなわち、限られた地域との比較ではあったが、『万葉集』と無縁の地域の歌のありようと『万葉集』内部における歌や文化のありように新たな目を向けることで、多くの研究の視点を開き得たと自己評価している。今後ともこうした方向で研究を重ねていく必要がある。

こうした指摘とともに、万葉の歌を生みだしてくる時代的社会的背景と思想、あるいは長歌形式の歌の中から短歌形式の歌が成立してくる一つの道筋、歌の発生を支える歌の発想や表現方法、さらに生きた歌のもっていた音律の理解、書記されるにあたっての漢文的表現の基盤の指摘等々について日本を超えた地域とのかかわりで様々な指摘がなされ、『万葉集』の研究についての多くの視点が提供された。これらの成果も万葉集研究に多角的な研究の可能性を示唆しており、今後の万葉集研究に寄与するところは大きいと考えるものである。